

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和7年7月31日
愛媛県

1 予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	その他
水稻	いもち病 （早期：穂いもち） （普通期：葉いもち） 紋枯病 セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ フタオビコヤガ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	少～やや少 少～やや少 やや少～並 やや少～並 やや少 並～やや多 やや少～並 やや少～並 やや多	
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ ミカンサビダニ ヤノネカイガラムシ	少～やや少 少 少 並 －	発生時期：並
かき	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ	やや少 やや少～並 やや少～並	
果樹共通	果樹カメムシ類	並	飛来時期： 並～やや遅
夏秋きゅうり	黄化えそ病 褐斑病 炭疽病 アブラムシ類 タバココナジラミ	並～やや多 やや少～並 少 並～やや多 並～やや多	
夏秋なす	アブラムシ類 ミナミキイロアザミウマ ハダニ類 タバココナジラミ	少～やや少 やや少～並 並～やや多 やや多～多	
夏秋トマト	葉かび病 アブラムシ類 タバココナジラミ オンシツコナジラミ	やや少～並 やや少～並 やや多～多 やや少～並	
いちご育苗床	炭疽病 アブラムシ類 ハダニ類 コナジラミ類	やや多～多 やや少～並 並～やや多 少	
さといも	疫病 アブラムシ類 ハダニ類 ハスモンヨトウ	－ 並～やや多 やや少～並 並～やや多	発生時期：遅
夏秋野菜全般	ハスモンヨトウ オオタバコガ シロイチモジヨトウ	並～やや多 並～やや多 並～やや多	

2 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 7 月 24 日発表（7 月 26 日～8 月 25 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 30 高 60% 高い見込み	少 30 並 40 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

向こう 1 か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

3 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期：穂いもち、普通期：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）少～やや少 （普通期）少～やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、葉いもち発生圃場率は早期、普通期ともに平年並、発病度は早期、普通期ともにやや少である。

(イ) 7 月 1～23 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適条件出現の判定では、準感染好適日が 7 月 11 日前後を中心に 8 地点で認められている（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料（穂肥）の過用を避ける。

(イ) 圃場観察に努め、葉いもち発生圃場で病勢が進展している場合には、早急に薬剤防除を行う。

(ウ) 今後、出穂期となる水稻では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除を実施する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、早期、普通期ともに発生を認めていない。

(イ) 普通期の茎数は多い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 早期では、止葉から下位 3 葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合には、追加防除を行う。

(イ) 普通期では、発生状況により応急防除を実施する（要防除密度：穂ばらみ期の発病株率 15～20%）。

(ウ) 薬剤が株元までかかるように散布する。

(3) セジロウンカ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、早期、普通期ともに平年並の発生である。

(イ) 予察灯では 6 月第 5 半旬頃、7 月第 3 半旬に誘殺されているが、誘殺数は少ない（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 普通期で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。

(イ) 防除は薬剤が株元までかかるように行う。

(4) トビイロウンカ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の定点調査では、発生を認めていない。

(イ) 7 月中下旬に行った広域調査では、発生を認めていない。

(ウ) 県下 6 か所の予察灯では、誘殺されていない。

(エ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により、早期発見に努める。
 (イ) 今後、出穂期となる水稻では、出穂期の基幹防除を実施する。特に、普通期で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- (5) イチモンジセセリ (イネツトムシ：第2世代)
 ア 予報の内容 発生量：並～やや多
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月中旬の定点調査(普通期・第1世代)では、1圃場で発生が認められている。
 (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
 (イ) 圃場観察により、発生が多い場合には若齢幼虫期(ツトの発生初期：8月上旬中甸)に防除する。特に、本虫に効果のある箱施用剤を処理していない圃場では注意する。
- (6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)
 ア 予報の内容 発生量：やや少～並
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月中旬の定点調査(普通期)では、発生を認めていない。
 (イ) 予察灯での誘殺数は、平年に比べ少ない(防除所ホームページ掲載データを参照)。
 (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 圃場観察に努め、8月に密度が急増する場合があるので注意する。
 (イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (7) コブノメイガ
 ア 予報の内容 発生量：やや少～並(普通期)
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月中旬の定点調査では、早期、普通期ともに平年並の発生である。
 (イ) 7月中下旬の広域調査では、発生圃場率が8.1%で平年(22.0%)に比べ少ない。
 (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
 (イ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後(若齢幼虫期)である。
- (8) 斑点米カメムシ類(早期・普通期)
 ア 予報の内容 発生量：やや多
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月中旬の定点調査(掬い取り調査)では、本田での発生は、早期はやや多、普通期は並～やや多の発生である。また、畦畔での発生は、早期で平年並、普通期でやや多～多の発生である。
 (イ) 予察灯でのアサスジカスミカメの誘殺数は、7月上旬頃に多かったが、その後は平年並で推移している(病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。
 (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 圃場周辺の除草を行う。なお、出穂直前の除草は、カメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂20日前と出穂時に2回実施すると効果的である。
 (イ) 出穂期の基幹防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期(出穂後10～14日頃)に地域の防除指針に従い追加防除する。また、多発時には、さらに7～10日後に防除を行う。
 (ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬い取り調査による虫数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

- (1) かいよう病
 ア 予報の内容 発生量：少～やや少
 イ 予報の根拠
 (ア) 7月中旬の定点調査では、葉でやや少、果実で少の発生である。
 (イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
 ウ 防除上の注意
 (ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。
 (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、防風垣や防風ネットを整備する。
 (ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので、防除を行う。

(エ) 甘平、愛媛果試第 48 号、はれひめ等の罹病性品種は注意する。

(オ) 既に発生が認められる園地では、早めの防除に努める。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、少の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、適切に処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が 200～250mm（または散布後 30 日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種せとか、河内晩柑、清見等の散布間隔は、累積降水量 150～180mm（または散布後 25 日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、寄生葉率、1 葉当たり雌成虫数ともに少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内の早期多発樹で、1 葉当たりの雌成虫が平均 2～3 頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 薬剤は、かけむらのないように散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果は、その後の発生源となるので、早期に除去し適切に処分する。

(イ) 被害は、園地内で局所的に発生し始めるので、園地観察を行い、発生後は早期防除に努める。

(5) ヤノネカイガラムシ（第 2 世代）

ア 予報の内容 発生時期：並

イ 予報の根拠

(ア) 第 2 世代幼虫の初発は八幡浜市合田では 7 月 18 日（平年：7 月 19 日）、松山市下伊台では 7 月 22 日（平年：7 月 24 日）で、両地点とも平年並である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、第 2 世代幼虫初発生から 30 日後を目安とする。

(イ) 幼虫初発日は、病害虫防除所ホームページ掲載データを参照。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、果実での発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝・発病果は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 定期防除に努める。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図る。

(イ) 防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) フジコナカイガラムシ (第2世代)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、寄生果実を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、多発園や常発園では1回目防除の3週間後に2回目を行う。

果樹共通 (キウイフルーツ、かき、かんきつ等)

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並 (新成虫) 飛来時期：並～やや遅

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップ、予察灯での誘殺数は、全ての地点で少なくなっている (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 県内12地点 (7月中旬調査) のヒノキ球果の結実量は、東・中予で比較的多いが、南予では少ない (表)。

(ウ) ヒノキ球果の果樹カメムシ類寄生虫数調査 (10回掬い取り) は、平均捕獲虫数は0.25頭/地点であり、平年 (0.93頭) に比べ少ない (表)。

(エ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、0.21個/球果 (平年1.01個/球果) と少なく、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はない (表)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的であるが、口針鞘数が少ないことから、新成虫の園地への飛来時期は平年並～やや遅と予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) 果樹カメムシ類は主に夕方から夜間にかけて加害するので、薬剤散布は夕方に行うと効果的である。

(イ) 8月以降は新成虫の発生時期となるので、園地観察により飛来に注意し、発生初期の防除に努める。

(ウ) 主に山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にあるので注意する。

(エ) 台風等による風雨後、園地に飛来する場合があるので注意する。

表 果樹カメムシ類 ヒノキ球果調査 (2025年7月調査)

調査地	ヒノキ球 果 結実量	10回すくい取り虫数							口針鞘数 ／球果
		チャバネオ		ツヤオ		クサギ		合計	
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	中	0	0	0	0	0	0	0	0
西条市丹原町川根	多	0	0	0	0	0	0	0	0
今治市菊間町西山	多	0	0	0	0	0	0	0	1.45
今治市玉川町龍岡下	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0
松山市菅沢（栗井）	中	0	0	0	0	1	0	1	0.80
久万高原町明神	中	0	0	0	0	0	0	0	0
砥部町鵜ノ崎	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0.05
伊予市双海町高岸	多	1	0	0	0	0	0	1	0
内子町五十崎	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0.20
宇和島市柿原	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0
西予市宇和町西山田	やや少	0	0	0	0	0	0	0	0
愛南町城辺緑	中	1	0	0	0	0	0	1	0
平均（R7）		0.17	0	0	0	0.08	0	0.25	0.21
平年値（H27～R6）		0.76	0.04	0.03	0	0.04	0.12	0.93	1.01
今年の順位（H27～R6）		8	8	7	6	3	8	9	9

野 菜

(1) 黄化えそ病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生はやや多である。

(イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマはやや少の発生である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2) 褐斑病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) 炭疽病（夏秋きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生は少である。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(4) 葉かび病（夏秋トマト）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないよう適正な肥培管理に努める。

(イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(5) 炭疽病（いちご育苗床）

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の広域調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。

(イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後に防除を行う。

(ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では、夕方遅い時間の灌水は避ける。

(エ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(6) 疫病（さといも）

ア 予報の内容 発生時期：遅

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向化が続くものとみられ

る。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察を行い、発病茎葉は早急に除去し、圃場外に持ち出し適切に処分する。

(イ) 風雨によって孢子が飛散し、急速に蔓延するので、発生圃場では治療効果のある薬剤で防除を行う。

(ウ) 発病前の防除に重点を置く。

(7) アブラムシ類（夏秋トマト、夏秋なす、夏秋きゅうり、さといも、いちご育苗床）

ア 予報の内容	<u>発生量：夏秋トマト やや少～並</u>
	<u>発生量：夏秋なす 少～やや少</u>
	<u>発生量：夏秋きゅうり 並～やや多</u>
	<u>発生量：さといも 並～やや多</u>
	<u>発生量：いちご育苗床 やや少～並</u>

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマトは発生を認めていない、いちご育苗床で平年並、夏秋なすでやや少、さといも、夏秋きゅうりでやや多の発生である。

(イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、平年並～少で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。

(8) ミナミキイロアザミウマ（夏秋なす）

ア 予報の内容	<u>発生量：やや少～並</u>
---------	------------------

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 薬剤防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(エ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(9) ハダニ類（夏秋なす、さといも、いちご育苗床）

ア 予報の内容	<u>発生量：夏秋なす 並～やや多</u>
	<u>発生量：さといも やや少～並</u>
	<u>発生量：いちご育苗床 並～やや多</u>

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋なす、いちご育苗床でやや多、さといもで平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 多発圃場では、散布間隔を短くして密度抑制に努める。

(エ) 雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草を行う。

(10) コナジラミ類（夏秋トマト、夏秋なす、夏秋きゅうり、いちご育苗床）

ア 予報の内容	<u>発生量：夏秋トマト タバココナジラミ やや多～多 オンシツコナジラミ やや少～並</u>
	<u>発生量：夏秋なす タバココナジラミ やや多～多</u>
	<u>発生量：夏秋きゅうり タバココナジラミ 並～やや多</u>
	<u>発生量：いちご育苗床 少</u>

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマトでタバココナジラミが多、オンシツコナジラミは発生

を認めていない、夏秋なすでタバココナジラミが多、夏秋きゅうりで、タバココナジラミはやや多、オンシツコナジラミは発生を認めていない、いちご育苗床でコナジラミ類が少である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 定期的な薬剤散布を行い、葉液が葉裏までかかるように散布する。

(イ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(ウ) コナジラミ類には、トマト・きゅうりのウイルスを媒介するものがあるので注意する。

(11) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7地点中2地点で多くなっているが、4地点では平年並、1地点で少なく推移している (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査等では、さといもの食害面積率は平年並、寄生虫数はやや多である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め(大豆では白変葉の発生)、若齢幼虫期に防除する。

(12) オオタバコガ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中2地点で多く、2地点で平年並、1地点で少なく推移している (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査では、夏秋トマト (タバコガ類) での発生は認めていない。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(13) シロイチモジヨトウ (ねぎ、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中3地点で多く、2地点では少なく推移している (病虫害防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。